カルタヘナ・デ・インディアス(コロンビア)の城壁の実施案が成立する経緯

- 16世紀中頃から17世紀初頭のスペイン都市で計画された新しい城壁に関する研究 -

ON THE PROCESS OF PLANNING THE WALLS IN CARTAGENA DE INDIAS (COLOMBIA)

- Study on the walls newly planned in Spanish cities between the mid-16th century and the early 17th century -

高柳伸一^{*1}

Shinichi TAKAYANAGI

This paper is composed of two sections. In first section, this paper analyzes the process of planning the new walls in Cartagena de Indias (Colombia). We can observe two factors, "preservation of urban area" and "capability for defense". Based on these factors, two basic plans were argued between the Court and local authorities. As a result, the plan which emphasizes "preservation of urban area" was selected. In second section, this paper discusses if we can observe these factors in other Spanish cities. Consequently, only in Coruña, we can see the same relation between two factors as in Cartagena de Indias.

Keywords : Walls, Military engineer, Cartagena de Indias, Spanish city, Habana, Santo Domingo

城壁, 工兵, カルタヘナ・デ・インディアス, スペイン都市, ハバナ, サント・ドミンゴ

1. はじめに

1-1. 研究の背景

本稿は16世紀中頃から17世紀初頭のスペインの軍事都市に関する研究の一環として、配置が異なる複数の城壁案が作成された都市を取り扱うことで、どのように新しい城壁が計画されていたのかを検討したものである。このような都市に焦点を置いた理由は、城壁に関する当時の議論の記録が存在する場合が多いからである。

本研究では、1530年前後に稜堡が出現した後、稜堡式築城術が各都市に本格的に導入される同時期の城壁の類型に関しては「旧城壁の近代化」と「新しい城壁」の2つに分類している^{注1)}。「旧城壁の近代化」はイベリア半島の都市で多く見られ、それは旧式の城壁を重砲の使用を前提とした近世の築城術に従い大幅に改築する築城となる^{注2)}。この種類の築城では、城壁の位置は大きく変化しない。他方、「新しい城壁」は新大陸でも見られ、城壁の配置は新たに決定される。本稿は「新しい城壁」に関する研究として、中米カルタヘナ・デ・インディアス(Cartagena de Indias)の城壁を分析したうえで、考察を深めるため他の6都市に関しても検証したものである。

1-2. 城壁案を整理分析する方法

各々の都市で作成された城壁案を整理分析する方法として、本稿では「市域の保全」や「築城の論理」と呼べる、当事者が有していたと判断できる評価基準の項目を設けている。これらの項目は、本稿の第一部で試みる宮廷と現地との議論の分析から本研究で独自に導いたものであるため、厳密な定義は困難であるが、おおよその意味は以下となる。「市域の保全」は、既存の街区や井戸を保持し通

常の市民生活や都市の発展等に支障が生じない城壁を優先する考え方である。具体的には、住民が建設した家屋や宗教施設そして井戸を、城壁を建設するために解体することなく使用し続け、さらに新たに入植してくる人々にとって必要な敷地も確保される。他方「築城の論理」はたとえ既存の街区の解体を余儀なくされても純粋に築城術に基づいて高い防御能力を達成する城壁を優先する。具体的には円形に近づけた城壁、内部を土塁とする三角形平面の稜堡、堀の整備等のように稜堡式築城術で適切とされる城壁を実現しようとする。その他「建設費の抑制」と呼べる項目も設けている。

1-3. 本稿の構成と目的

本稿は二部構成となっている。第一部ではカルタヘナ・デ・インディアスで建設された城壁の実施案が成立する経緯を分析して、どのように実施案が定まったのかを検証する。結論として、建設費に加え「市域の保全」と「築城の論理」が際立っており、それらが対立する図式で実施案が決定されたことを明示する。

第二部では、これらの評価基準やその図式が他の都市においても確認できるのかを検証する。第二部で取り上げる都市の中には実際に城壁が建設された時期は17世紀初頭以降になっている場合もあるため、複数の計画案が作成された背景のみを検証し、実施案が定まった経緯は分析しない。第二部では6つのスペイン都市を取り扱う。分析した結果、カルタヘナ・デ・インディアスと同じように「市域の保全」と「築城の論理」が対立する図式を確認できたのはコルーニャ(Coruña)のみであった。他の都市では、たとえこれらの評価基準が確認できても双方は対立していなかった。

^{*1} 大同大学工学部建築学科 准教授・博士(工学)

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Daido University, Dr.Eng.

多くの既往研究では、カルタヘナ・デ・インディアスを含め、都市を単位に城壁を含む築城の歴史が、新しい史料も用いることで明らかにされる^{1)-3), 11)-15), 17), 注3)}。それに対して、本稿は、複数の都市を同時に検証することで、防御整備の必要性という共通した認識の上に、どのように新しい城壁が計画されたのかを考察することを目的としている。これまで同様な視点で配置の異なる城壁案が作成された複数のスペイン都市を同時に論じた研究は見られない。近世都市は城壁によって平面が固定される場合もあるが、本稿の意義は、新しい城壁が計画される様相を具体的に分析した点にある。なお本稿では *wall* を市壁ではなく包囲城壁もしくは城壁と訳している。

カルタヘナ・デ・インディアスの築城史は複数の研究者によって明らかにされており¹⁾⁻³⁾、当時の書簡等の文字史料も部分的に活字写本されている^{1), 10)}。築城史の経緯に関しては、本稿では Enrique Marco Dorta の研究¹⁾に大きく依存している。本稿の新規性はカルタヘナ・デ・インディアスの分析から城壁が計画される際の評価基準を明らかにし、それらが他の 6 都市においても見られるのかを検証した点にある。本研究では、インターネットで史料が部分的に公開されている「PARES(Portal de Archivos Españoles)」^{注4)}も活用しており、重要な書簡の原文は注に掲載している。さらに現地調査も実施している^{注5)}。他の 6 都市の中で、ハバナ(La Habana)、サント・ドミンゴ(Santo Domingo)、イベリア半島のカルタヘナ(Cartagena)の分析は既往研究^{9), 11)-12), 14)-16)}のみに基づいている。

Fig.1 Walls (constructed in 1631) of Cartagena de Indias and the Project of Battista Antonelli [Drawn by author]

2. カルタヘナ・デ・インディアスの築城に関して

カルタヘナ・デ・インディアスの都市は 1533 年に創設された。本稿で分析する都市を包囲する城壁は、1631 年頃に完成している (Fig.1)。その他、湾の岸辺と郊外の築城があった。湾の防御整備は、敵対者の艦船がカリブ海からラス・アニマス湾(bahía de las Animas)に侵入できないように、湾の岸辺に要塞を建設する築城であった (Fig.1)。1566 年から 18 世紀半ばまでに少なくとも 8 か所以上の地点に要塞(fuerte)や砲台(batería)等が建設されている^{注6)}。他方、17 世紀初頭から市街化が進んでいたヘツェマニ島(la isla de Getsemani)の防御整備として、陸地に面した城壁の建設が 1631 年から開始されている (Fig.1)。

3. カルタヘナ・デ・インディアスの城壁の実施案が成立する経緯

城壁に関する最初の記録は 1567 年に見られるが^{注7)}、実施案が定まる具体的な議論は、本研究で確認している限り、1594 年から始まり^{注8)}、フェリーペ 3 世スペイン国王(在位 1598-1621)が実施案を定めた「国王訓令(real cédula de instrucción)」を発効する 1612 年 10 月 12 日まで続く^{注9)}。本稿はこの期間を 2 つに区分している。第一期は 1594 年から 1599 年頃までで、この期間に 3 つの案が作成されている。第二期は、第一期に作成された 3 つの案から 2 つが選ばれ、1607 年から 1612 年まで現地と宮廷の間で審議された結果、実施案が下に述べるアクニャ案に決定する期間である。

3-1. 第一期(1594 年から 1599 年まで)

この第一期にアクニャ案に加え、アントネリ案と 1599 年頃の案の合計 3 つの計画案が作成されている。その中のアクニャ案とアントネリ案が基本案として第二期に審議される。

3-1-1. アクニャ案

アクニャ案は、カルタヘナ・デ・インディアスの総督ペドロ・デ・アクニャ(Pedro de Acuña, 生没年不詳)が 1594 年に再度「工兵(ingeniero militar)」^{注10)}バッティスタ・アントネリ(Battista Antonelli, 1547-1616)が現地を訪れる前から進めていた、木材を用いた築城(fortificación de madera)に基づいたものである^{注11)}。この木材を用いた築城とは、土と粗朶も使用した短期間で防御を整える臨時的な築城であったと理解できる。アントネリは 1587 年に同市を訪れており、1594 年の訪問は 2 回目となる。アクニャ案の城壁は 1597 年に作成された作者不明の図面から理解できる (Fig.2)。この図面にはアントネリ案も重ねて描かれているが、アントネリの 1595 年の図面 (Fig.3) と比較すると、北東部の城壁が少し外側に移動している。他方、アントネリの 1595 年の図面にも総督アクニャが進めていた築城が描かれているが、後に議論されるアクニャ案ではラ・クルス稜堡(baluarte de la Cruz)から南側のカレタ (Caleta) と呼ばれた地点に続く城壁は省略されている (Fig.1, Fig.3)。

Fig.2 Project of Pedro de Acuña, 1597
[A. G. I., M. y P., Panamá 11, retouched by author]

城壁の配置は、北東上部の側面を除き、既に形成された市街地を包囲する形でカラマリ島(la isla de la Calamari)の地形に沿って決定されている (Fig.1, Fig.2)。地形に従っているため、カリブ海に面する北西側の城壁は直線状になっており、またサンタ・カタリーナ稜堡(Santa Catalina)から構成される北側端部の城壁は長方形に近

くなっている(Fig.1)。そのため全体は稜堡式築城術で適切とされる円形に近づける形状ではない¹²⁾。これらの特色から、アクニャ案は、純粋に築城術に従って高い防御能力の城壁の実現を優先したのではなく、既存の市域の保全を重視したものであったと言える。

3-1-2. 1595 年のアントネリ案

アントネリは、1587 年に訪れた際には湾の防御を中心とした築城案を示していたが¹³⁾、都市を包囲する城壁案は作成していなかった。城壁案は、1594 年の訪問後に同工兵が作成した 1595 年 4 月 18 日付けの図面で示されている(Fig.3)。

Fig. 3 Project of Antonelli, Bautista Antonelli, 1595
[A. G. I., M. y P., Panamá 10, retouched by author]

城壁の形態に関して、アントネリ案は稜堡式築城術に則したもので、三角形平面の稜堡を備える城壁が円形に近くなるように配置されている。北東部の城壁の外側にはカリブ海とラス・アニマス湾を連結する形で堀(foso)が掘削される(Fig.1)。このような城壁を実現するため、アントネリ案では北東部に形成され始めた街区は解体されることになる。解体される街区は図面にも描かれている(Fig.3)。後の記録¹⁴⁾からアントネリ案の城壁は、テハディジョ通り(la calle del Tejadillo)からヘツェマニ島に向かって楕円形に配置される(Fig.1)。1631 年頃に完成したアクニャ案に則した城壁を表す 1630 年の図面¹⁵⁾を基に面積比で計算すると、おおよそであるが、アントネリ案では城壁で包囲される市域は約 35%縮小することになる。以上、アントネリ案は、アクニャ案との比較から、より高い防御能力を備える城壁を実現しようとした計画であったと言える。

3-1-3. 1599 年頃の城壁案

1599 年頃の城壁案は、既往研究に従えば、海軍大将ルイス・ファハルド(Luis Fajardo, 1545/0-1615/7)が送付した 1599 年 3 月 4 日付けの書簡¹⁶⁾に合わせて作成されたと推測されている¹⁷⁾、作者不明の 1599 年頃の図面から確認できる(Fig.4)。同図面にはカルタヘナ・デ・インディアスの都市が描かれており、その上に城壁を描いた小さな紙を貼り合わせることで計画案が図示されている。描かれている市域は実際より小さくまた街区も不正確となっているが、図面から同案の構想は理解できる。

城壁は、当時理想的とされた正多角形の城塞¹⁸⁾に基づいている。多くの既存の街区は解体されるが、図面にはヘツェマニ島にも防壁が描かれており、解体する街区を隣接する同島に移転することを前提とした案であったと推測できる(Fig.4)。同図面との関連性が指摘されている上記したルイス・ファハルドの書簡には、アントネリ

の名前は明記されていないがアクニャ案とアントネリ案に対する懸念が述べられている。アクニャ案に関しては多くの守備兵が必要になる点が指摘されており、アントネリ案については市街地が取り残される点が問題視されている¹⁹⁾。1599 年頃の案はこれらの問題点を解決する対案として宮廷に示されたと想像できる。

Fig. 4 Project of 1599, 1599 ?
[A. G. I., M. y P., Panamá 20, retouched by author]

3-2. 第二期(1607 年から 1612 年まで)

この第二期において第一期に作成された 3 つの案からアクニャ案とアントネリ案の 2 案が審議されている。1599 年頃の案は審議の対象になっていない。第二期は具体的には 1607 年 8 月 4 日に審議録²⁰⁾が作成されている宮廷のインディアス軍事評議会(Junta de Guerra de Indias)の審議から、1612 年 10 月 12 日付けの国王訓令²¹⁾の発効までの約 5 年間となる。この経緯の中で、現地の総督が作成した 1608 年 7 月 26 日付けの書簡²²⁾と工兵クリストバル・デ・ロダ(Cristóbal de Roda, 1561-1631)が作成した 1609 年 1 月 18 日付けの書簡²³⁾の 2 通が宮廷の決定に大きな影響を与えたと理解できる。これら 2 通の書簡も含め当時の記録から実施案が定まる経緯を整理すると以下ようになる。

3-2-1. 1607 年 8 月 4 日付けのインディアス軍事評議会の審議録

第二期の最初の記録である 1607 年 8 月 4 日の宮廷の審議録²⁴⁾には、アントネリの名前は記されていないが、一部の街区を解体する同工兵の案も取り上げられている。審議録には城壁の配置に関して、“工事に多くの時間と資金が必要になるが、ペドロ・デ・アクニャが進めていた木材を使用した臨時的な築城に基づいて都市全域を包囲する城壁を(石造で)建設する案にするのか、もしくは、十分な井戸と貯水槽(jagüey)を城壁内に収容したうえで、テハディジョ通りからカリエンテ地区(barrio Caliente)と呼ばれるマチャドの建物(casas de Machado)までの箇所で都市を切り離す形で城壁を建設する案にするのかで、相対する意見が存在している”²⁵⁾と記されている(Fig.1)。本研究では上記したカリエンテ地区およびマチャドの建物に関して位置等を確認できなかった。他方、上記審議録で述べられている生活用水に関しては、現在サン・ディエゴ地区(barrio de San Diego)として知られているサント・トリビオ地区(Santo Toribio)は当時「貯水槽地区(los Jagüeyes)」と呼ばれており、それは現在のフェルナンデス・デ・マドリード広場(plaza de Fernández de Mardid)の周辺地域も含まれ、同地域には生活用水を供給する貯水槽が点在していた²⁶⁾(Fig.1)。上記審議録には貯水槽は城壁内に収容すると述べられているが、後に現地から送付された書簡には城壁外に位置すると記されており、貯水槽の位置に関しては宮廷と現

地の間で認識が異なっている。そしてインディアス軍事評議会は、総督に対して、現地に滞在している艦隊の大將(*general*)と司令官(*almirante*)に加え、経験豊富な人物を集めて視察を行い、適切な城壁案を協議して、報告書を送付するように命じている^{註27)}。

3-2-2. 1608年7月26日付けのベラスコ総督の書簡

上記した宮廷からの指令に応じて、ディエゴ・フェルナンデス・デ・ベラスコ総督(Diego Fernández de Velasco, 生没年不詳)は、海軍大將(*general de la Armada*)ヘロニモ・デ・ポルトガル(*Gerónimo de Portugal*, 生没年不詳)に加え、歩兵隊の隊長(*capitanes de infantería*)を集めて協議を行っている^{註28)}。しかし同総督に従えば、参加した軍人は、城壁に関して、同総督が書簡を作成した1608年7月26日の時点では意見書等を書いていない。その理由は、忙しい航海日程のため、意見を文章でまとめられなかったとしている^{註29)}。そのため、同書簡にはベラスコ総督の見解のみが記されている。本研究では参加した軍人の意見書等を見つけれなかったが、本稿3-2-3で扱う1609年1月18日のロダの書簡^{註30)}から、デ・ポルトガルを含めた軍人はアントネッリ案を支持していたと判断できる。

その軍人の見解とは異なり、ベラスコ総督はアクニャ案を支持しアントネッリ案には反対している。ベラスコ総督はアントネッリ案に反対する理由を以下のように5つの項目に整理している^{註31)}。(1)ここは活発な交易によって成長する土地でその場所を小さくしてしまうと、建物や住宅を建てる敷地がなくなってしまう。(2)計画通りに(城壁で)都市を切り離してしまうと全ての生活用水が敵対者によって利用されてしまう^{註32)}。(3)既存の建物を解体するため、損害を受ける住民に(補償金を)支払うようになる。(4)同箇所を掘削して堀を築くことは困難である。(5)城壁の外側には(堀を掘削できないため)十分な場所ができ、そこで敵対者が塹壕を掘削し、重砲を設置することができるようになってしまう。

以上がベラスコ総督の見解であるが、上記(1)と(2)は交易と都市の発展および市民生活に関連した項目で、(3)は建設費についてである。建設費に関しては、本稿3-2-1で述べた通り、1607年8月4日の宮廷の記録にはアクニャ案には多くの費用と時間を要すると記されていた^{註33)}。この見解に対して、ベラスコ総督は1609年6月6日付けの書簡の中で、アントネッリ案の実施に伴い100,000ペソ(*peso*)以上の資金が街区を解体する際に補償金として必要となるため、建設費の点でも同案は不適切であると反論している^{註34)}。

また、上記(4)と(5)は、アントネッリが計画していた北東部の街区を解体した後に実施する堀の掘削工事に関してである。その堀に関して、ベラスコ総督は宮廷に送付した上記1609年6月6日付けの書簡の中でも、たとえ深く掘削しても、北東風の影響で堀は短期間で浜砂によって埋まってしまうと記している^{註35)}(Fig.1)。

3-2-3. 1609年1月18日付けの工兵ロダによる書簡

アントネッリの甥であるクリストバル・デ・ロダは1608年10月にカルタヘナ・デ・インディアスに到着している。城壁に関しては、ロダは1609年1月18日付けの書簡^{註36)}でアントネッリ案に反対している。その理由として、”取り残される場所は、多くの住民が暮らしており、修道院や農家といった非常に良い建物がある都市の中でも最も高所であり、もし都市を切り離すのであれば国王殿下がそれらの(補償金の)支払いをするようになり、また多くの農園(*güertas*)があつてそこには市民の皆が利用している市内には他にないほど良

い井戸があるためです”^{註37)}と記している。ここでロダが述べている修道院は1608年に建設されたサン・ディエゴ修道院(*convent de San Diego*)であると考えられる(Fig.1)。

3-2-4. 宮廷のインディアス軍事評議会の決定

宮廷は上記したロダの書簡の日付から約11か月後にインディアス軍事評議会を開催し、総督とロダの書簡内容を審議している^{註38)}。その1609年12月16日付けの審議録には、”都市全体を小塔(*cubos*)または「小さな稜堡(*traveses*)」を備える(内部が土塁造ではない)簡易な城壁で取り囲み、敵軍が重砲を設置できる2つの側面に関しては防御を考慮して稜堡を備える城壁にするという考えに至った”^{註39)}とアクニャ案に則した城壁を建設するという結論が記されている。ここでの2つの側面は北東と南西に面した側面のことである(Fig.1)。本稿3-2-2で述べたベラスコ総督と共に協議を行い、アントネッリ案を支持していたと考えられるデ・ポルトガル等の軍人の見解は、1609年12月16日の審議録にも全く言及されていない。

その後、既往研究に従えば、1610年1月20日付けの評議会の記録には、建設費に関連して、王室以外に、どこから資金を調達するかを調べるように現地に指示を出したことが記されている^{註40)}。そして、実施案を定めた1612年10月12日付けの国王訓令^{註41)}が新しい総督に就任したディエゴ・デ・アクニャ(Diego de Acuña, 生没年不詳)に送付されている。そこには、既に取り上げた1609年12月16日付けの審議録と同様、城壁に関して、敵軍が重砲を設置できる北東と南西の側面には稜堡を増設するが、それ以外は「簡易な城壁(*muralla cencilla*)」にすることが記されている^{註42)}(Fig.1)。

実際に建設された城壁は、北東部と南西部には内部が土塁造の三角形平面の稜堡が築かれているが、他の側面には、台形平面の小さな稜堡を備える内側が土塁造ではない城壁も含まれている(Fig.1)。またアクニャ案を示す1597年の図面には描かれていなかったが、北東上部にも城壁が建設され、都市は城壁で完全に包囲された。

4. 実施案が定まった経緯の分析

実施案が定まった経緯の分析として、ここでは主に、本稿3-2-2と3-2-3で既に取り扱った1608年7月26日のベラスコ総督の書簡^{註43)}と、1609年1月18日のロダの書簡^{註44)}に基づき、どのような評価基準に従って城壁が議論されたのかを整理する。ベラスコ総督とロダは共にアクニャ案を支持しアントネッリ案には反対していた。ベラスコ総督はアントネッリ案の不利益性を訴える際、5つの項目に内容を整理していた^{註45)}。最初の2つは、新しい建物を建てる敷地と生活用水を保持する問題で、それは「市域の保全」と呼べる評価基準であった。3つ目は建設費に関連したもので、解体に伴い発生する補償金についてであった。残りの2つは堀の掘削と城壁の外側の防御で、アントネッリ案の堀に対する否定的な見解であった。

ベラスコ総督とは対照的に、本稿3-1-2で論じたように、アントネッリ案は、たとえ既存の街区の一部を解体しても、高い防御力が期待できる、楕円形もしくは円形に近い城壁の実現を企てたもので、それは「築城の論理」を優先したものであった。

他方、上記した1609年1月18日の書簡に示されているロダの見解は、多くの住民が生活して立派な建物が多くあり、貯水槽もある北東部の街区の保持を重視しており^{註46)}、それはベラスコ総督と同様に「市域の保全」に従ったものであった。

本稿3-2-2および3-2-3で述べた通り、ベラスコ総督とロダの両者は一様にアントネリ案で実施される街区の解体に伴い発生する補償金は国王が負うべきであると述べていた。このような経緯から、建設費も重要な評価基準になっていたことが理解できる。

以上、カルタヘナ・デ・インディアスの城壁の実施案が成立する経緯を分析した結果、建設費に加え、既存の街区や生活用水の保持を重視した「市域の保全」と、より高い防御能力の城壁の実現を優先した「築城の論理」の2つの評価基準が際立っていた。アクニャ案とアントネリ案の相違は「市域の保全」と「築城の論理」のどちらを優先させるのかの違いであり、双方は対立関係にあった。最終的には、宮廷にとっては解体に伴う補償金を支払う懸念もない「市域の保全」を優先したアクニャ案が採用されていた。この結論は解体する市域が最大となる1599年頃の案が第二期では審議の対象になっていないことから裏付けられる。

5. 16世紀中頃から17世紀初頭の他の都市の城壁案

本稿の第二部として、ここから、これまでの本研究の成果に加えて、既往研究も活用して、他の都市においてもカルタヘナ・デ・インディアスで見られた評価基準とその図式が確認できるのかを検証する。本稿では、図面等が存在して城壁の配置を分析できるのかを基準に選んだ、16世紀中頃から17世紀初頭にかけて配置が異なる複数の城壁案が作成されたスペインの6都市を取り扱う^{注47)}。中米都市が2つ、北アフリカの都市が1つ、そして、イベリア半島の都市が3つである。ここで取り上げる都市に関しては、実際の城壁は17世紀初頭以降に建設された場合もあるため、複数の計画案が作成された要因に関してのみ検討し、実施案が成立する経緯は分析しない。

5-1. サント・ドミンゴ(現ドミニカ共和国)

サント・ドミンゴでは1543年に城壁の建設が開始されていたが、工事は中断していた。その後、1589年と1608年にアントネリが新しい城壁案の図面^{注48)}を作成している。前者には城壁の輪郭線のみで街区等は描かれておらず、また新しい城壁の形状も双方で少し食い違っている。2枚の図面には北側の配置で大きな違いが見られるが、1543年の城壁が示されている^{注49)}(Fig.5)。従って、2枚の図面には一致しない点もあるが17世紀初頭までに少なくとも1543年の城壁とアントネリ案の2つの基本案があったと言える。ここでは1608年の図面に描かれている1543年の城壁に基づき検討する。

Fig. 5 Santo Domingo [Drawn by author based on Antonelli (1608)]

双方の相違は配置に加え、城壁の形態となっている(Fig.5)。まず、配置に関しては、西側の城壁がアントネリ案では1543年の城壁と比較して、都市側に移動している。これは市域が当初の予想に反して、約43年後にアントネリが城壁を計画した時点においても拡張していなかったことが要因になっている。既に1568年の記録には、現地から、当初の予測とは異なり、人口が増加していないため、城壁内には多く林と農園が残り、このまま建設を進めるのは適切ではないと報告されている^{注50)}。カルタヘナ・デ・インディアスではルイス・ファハルドは囲い地が広くなるアクニャ案に対して多くの守備兵が必要になると懸念していた。サント・ドミンゴにおいても拡張しない市域に応じて囲い地を縮小することは防御上有益になると判断されていたと理解できる。他方、城壁の形態に関しては、1543年の城壁と比較して、アントネリ案では西側の城壁が楕円形に近くなっている。カルタヘナ・デ・インディアスにおいてもアントネリ案の城壁は楕円形になっていた。加えて、1543年の城壁は稜堡を備えない中世的な城壁として描かれているが、アントネリ案では堀も整備される稜堡式となっている^{注51)}(Fig.5)。以上、サント・ドミンゴでは1543年に建設が開始された城壁の工事が中断した後、アントネリ案が作成されていたが、その背景には、当初の予測に反して市域が拡張しなかったという状況に加えて、稜堡式築城術の採用という「築城の論理」があった。なお実現した城壁は17世紀末に建設が再開され18世紀初頭にほぼ完成しているが、1543年の城壁と同じように内側に農園や空地が残されていた。

5-2. ハバナ(現キューバ)

同時期のハバナでも複数の城壁案が存在しており、それらの中で配置をほぼ特定できるのは、フアン・マルドナド・バルヌエヴォ総督(Juan Maldonado Barnuevo, 生没年不詳)の時代(1592-1602)に作成された計画案と、1603年にクリストバル・デ・ロダの計画案の2つとなる^{注52)}(Fig.6)。マルドナド総督時代の図面は確認できないが、ロダの図面にはマルドナド総督時代の城壁も描かれている。

Fig. 6 La Habana [Drawn by author]

配置に関して、ロダ案の城壁はマルドナド総督時代の案より外側に移動している。このように城壁が移動した要因は、ロダの書簡から判断しても、ハバナの市域が拡張した結果であった。1603年、ロダはマルドナド総督時代に計画された城壁の外側に新しい建物が既に建設されており、同案を実施することはできないと述べている^{注53)}。従って、双方の案の間には最大で11年間の隔たりが存在するが、ロダはその期間に拡張した市域を保全するために城壁を外側に移動させたと言える。城壁の形態に関してはマルドナド総督時代の計画

案にも稜堡式築城術の特色が示されている。そのため、「築城の論理」に関しては双方の案で大きな違いはなかったと判断できる。以上、ハバナにおいて複数の城壁案が作成された理由は、最大で11年となる期間に拡張した市域に応じて「市域の保全」が企てられた結果であった。なお実施案は1673年に工兵フアン・デ・シスカラ(Juan de Ciscara, 生没年不詳)によって作成されたもので、ロダの時代からさらに拡張した市域に従って配置が決定されている。

5-3. ララシュ(現モロッコ)

スペインが1610年11月に私掠船対策の拠点として領有した北西アフリカの沿岸部に位置するララシュ(Larache)では、アントネッリの計画に従って城壁が建設された^{注54)}。実施案は領有から約5年後に決定されているが、その期間に同工兵は独自の案を3つ作成している(Fig.7)。その他、フアン・デ・メディシス(Juan de Médicis, 生没年不詳)が1つの独自案を作成している。またアントネッリとメディシスの共同案が1つある。共同案以外、当時の記録から計画案の内容を確認できる。ここではアントネッリの3つの案を取り上げる。

Fig.7 Three Projects for Larache [Drawn by author]

アントネッリの3つの案に関しては、最初の案から最後の案にかけて、徐々に城壁が外側から新しい居住地に向かって後退している(Fig.7)。本研究で分析した結果、最初の1610年の案は3つの条件を満たすことで成立していた。既存の2つの要塞を連結する条件、既存の三角形平面の要塞を城壁内に収容する条件、そして、高台を城壁内に入れる条件である。最初の条件を除き、これらは「築城の論理」に基づいている。しかし、最初の案に対して、宮廷側は資金不足に陥り建設工事が中断することを恐れて、建設費を抑えた計画案に変更するように指示を出している。アントネッリは、その「建設費の抑制」の指示に従って、2つの新たな計画案を作成している。カルタヘナ・デ・インディアスにおいても建設費がひとつの評価基準となっていたが、ララシュのように建設費を抑制する目的で新しい計画案が作成されることはなかった。実施案となった最後の1612年の案では、最初の案と比較すると、既に述べたように城壁が後退しているが、その結果、上記した「築城の論理」に従った2つの条件は放棄されている。以上、ララシュで作成された一連の城壁案は「建設費の抑制」と「築城の論理」が対峙した経緯を示している。

5-4. コルーニャ

コルーニャはスペインの「無敵艦隊(1588)」が出港した港町で、1589年5月イングランドは報復として同市を奇襲している。奇襲後、ティブルシオ・スパノッキ(Tiburzio Spannocchi, 1541-1606)

が現地に派遣され、同工兵は配置が異なる4つの城壁を計画している^{注55)}(Fig.8)。同市は旧市街地とペスカデリア地区(Pescadería)から構成されていた。前者には中世時代に市壁が建設されており、ペスカデリア地区にも西の陸地側に旧式の城壁が築かれていた。スパノッキは各々で総延長と建設費が異なる第1案(opinión primera)から第4案(opinión cuarta)の計4つの案を作成している。建設費が異なる複数の案が作成されたという意味で、ララシュと同様に「建設費の抑制」も考慮されていたと言える。スパノッキの計画には、城壁外周部に堀や斜堤から構成される「防御地帯(zona polémica)」を構築する重要性が示されている^{注56)}。

Fig.8 Four projects (opinions) of Spannocchi for La Coruña [Retouched by author based on José Ramón Soraluce Blond^{注57)}

4つの中の3案では、規模は異なるが、既存の街区は解体される。最も規模の小さな第1案は、旧市街地を包囲していた市壁を近代化する築城である。この案では防御地帯を構築するため、市壁から300パソ(paso)^{注58)}離れた外周部の家屋が解体される(Fig.8)。ペスカデリア地区に関しては、陸地に面する旧城壁を残すのみで、ほぼ無防備となる。第2案と第3案では、共に旧市街地の外側に新しい城壁が建設される。双方の違いは囲い地の面積と城壁の形状である。第2案では、新しい城壁の内側に移転できるペスカデリア地区の家屋は限定されるが、第3案では数多くの家屋を移転できる。城壁の形状に関しては、第3案の方がより楕円形に近づいている。

これまで述べた3つの案の中の第1案と第2案ではペスカデリア地区の一部はほぼ無防備になる。第3案においても、新しい城壁の内側に同地区の多くの家屋を移転する計画であるが、城壁の外側に位置する既存の街区は解体される。そのため、これら3つの案では「市域の保全」より、防御地帯の構築や楕円形に近づけた城壁といった「築城の論理」が優位になっていると言える。それとは対照的に第4案は新しい城壁で既存の市域全体を包囲する築城で「市域の保全」が優位になっているが、その一方で、ペスカデリア地区の城壁は直線状になっており、さらに「建設費の抑制」も考慮されているため、土塁造ではない簡易な城壁が含まれる。また稜堡も西の側面と高台がある北の側面の一部のみに建設される^{注59)}。以上、コルーニャでは「建設費の抑制」も念頭に複数の城壁案が作成されていたが、それらの中にカルタヘナ・デ・インディアスと同じように「市域の保全」と「築城の論理」が対立している図式を見ることができた。双方の都市では、複数の計画案が比較的短期間に作成されていた点と、街区の解体が計画されていた点が共通していた。

5-5. カディス

カディス(Cádiz)で作成された城壁案は、本稿で扱う他の都市では見られない、2つの異なる構想に付随して理解できる^{注60)}。敵軍の侵攻から市域を保護する「包囲城壁」と、有事の際には住民の騒乱も想定して都市に対する攻撃も念頭に置いた「都市抑制型城塞(ciadadela)」^{注61)}の2つの構想が存在していた。前者は1574年頃にジョヴァンニ・ジャコモ・パレアリ・フラティノ(Giovan Giacomo Paleari Fratino, 152?-1586)が作成した計画に基づき、後者は1587年にイングランドが同市を奇襲した後、スパノッキイによって提案された。同市では、フラティノが現地で活動する前となる1554-58年の間にジョバンニ・バッティスタ・カルビ(Giovan Battista Calvi, 1500?-65)も城壁案を作成している。

Fig. 9 Three projects of walls for Cádiz [Matteo Neroni, *Atras A (Forti di Uropa)*, 1590-1605, Biblioteca dell' Istituto Storico, retouched by author]

既往研究^{注62)}に従えば、スパノッキイが作者である可能性もある図面集(1590-1605)にはカルビとフラティノの2案を含めた、当時無防備であった北西側面を閉じる3つの新しい城壁が描かれている(Fig.9)。カルビとフラティノの配置には大きな違いはないが、城壁の形状と稜堡の数が異なっている。この違いは、カルビと比較して、フラティノは稜堡式築城術がより成熟した時代に活躍した工兵であるため、フラティノ案の方が城壁の形状は楕円形に近くまた稜堡の数も、カルビ案の3つから5つに増えている。地形に沿って城壁を巡らす案は、明らかに敵軍の上陸を阻止する機能を最大限に考慮した築城で、スパノッキイ案の可能性はある。本来スパノッキイの構想は都市抑制型城塞であったが、この城壁案は同工兵による包囲城壁が示されていると想像できる。以上、カディスでは2つの相対する構想が存在しており、その中のひとつである「市域の保全」を前提とした包囲城壁の構想に従って、3つの案が作成されていた。これら3つの案はそれぞれ稜堡の数や城壁の配置等が異なっていたが、これらの相違は「築城の論理」の違いに基づくもので、カルタヘナ・デ・インディアスやコルーニャの場合のように「市域の保全」と「築城の論理」が対立した様子を示しているものではなかった。

5-6. イベリア半島のカルタヘナ

イベリア半島のカルタヘナでは、16世紀半ばから18世紀末にかけて、4つの段階を経て配置が異なる複数の包囲城壁が建設されている^{注63)}。これらの推移から、カルタヘナは地中海に面した重要な軍港で、新しい城壁を建設することで段階的に市域を拡張した都市であったと言える。ここでは16世紀中頃から16世紀後期に見られる

第1段階から第2段階の城壁に関して論じる。

第1段階の城壁は1544年1月末には建設が開始されていたと考えられている。1541年に砲兵隊大将アンドレス・ダバロス(capitán general de la artillería Andrés Dávalos, 生没年不詳)が稜堡式の城壁案を作成していたが、同案は実施されなかった。第1段階で実現された城壁は、1544年の図面^{注64)}で示されており、それは円形平面の隅塔を備える旧式のものであった(Fig.10)。第2段階の城壁は、フェリーペ2世(在位1556-98)の命令で1570年同市にヴェスパシアーノ・ゴンザーガ(Vespasiano Gonzaga, 1531-91)^{注65)}と共に派遣されたアントネッリの実兄であるジョバンニ・バッティスタ・アントネッリ(Giovan Battista Antonelli, 1510?-88)が計画した。ジョバンニ・バッティスタの計画は第1段階の城壁を稜堡式築城術に従って大幅に改築するもので、それは旧城壁の近代化であった。そのため城壁の位置はほとんど変化していないが、西の側面に関しては旧城壁の外側に新しい城壁が配置されている(Fig.10)。既往研究に従えば、1569年に起こったアルプハールスの反乱(la Guerra de las Alpujarras, 1569-71)によって同市の軍港としての重要性が高まり、また人口も増えた結果、新しい城壁が建設された^{注66)}。具体的には、艦隊を補給する王室の施設(Casa del rey)を拡張する必要も要因となって新しい城壁が造られた。第1段階から約26年後に計画された第2段階の城壁によって拡大した西側の区域で1570年代に王室の施設の建設が開始されている^{注67)}(Fig.10)。第2段階の城壁の大部分は現存しておらず、工事も比較的短い期間に実施されたと考えられているため、それは臨時的な築城に近かったと指摘されている^{注68)}、17世紀を通して同市の包囲城壁であり続けた^{注69)}。以上、カルタヘナにおける第1段階から第2段階の城壁の推移は、旧城壁の近代化という「築城の論理」に加え、王室の施設を拡張するためにも新しい区域が必要とされたことが要因であった。

Fig. 10 Cartagena [Drawn by author based on Munuera Navarro]

6. まとめ

本稿は、稜堡式築城術が本格的に各都市に適用される16世紀中頃から17世紀初頭にかけて新しい城壁がどのように計画されたのかを分析することを目的に、配置が異なる複数の城壁案が作成された都市を検討したものであった。第一部ではカルタヘナ・デ・インディアスで建設された城壁の実施案が定まった経緯を分析した。その結果、アクニャ案とアントネッリ案に関する審議は、「市域の保全」と「築城の論理」と呼べる評価基準が対立した図式を示すもの

で、最終的には「市域の保全」を優先したアクニヤ案が採用されていた経緯を明示した。アクニヤ案は既存の街区や貯水槽を保全して通常の市民生活や都市の成長に支障が生じない都市側の利益に則した城壁であった。他方、より高い防御能力の城壁を企てる「築城の論理」を優先したアントネリ案は堀も整備される楕円形の城壁を実現するためにも、既存の街区の解体を強いる築城であった。

第二部では、他のスペインの 6 都市を分析することで、カルタヘナ・デ・インディアスで見られた評価基準やその図式が他の都市においても確認できるのかを検討した。その結果、同じように「市域の保全」と「築城の論理」が対立していた都市はコルーニャのみであった。このことから、カルタヘナ・デ・インディアスから理解できた新しい城壁が計画される様相は当時のスペイン都市では一般的ではなかったと結論付けることができる。双方の都市では短期間に複数の計画案が作成されていた点と、既存の街区の解体が計画されていた点が共通していた。これら 2 都市を含め、本稿で分析した 7 都市で実現された城壁は全て「市域の保全」を優先したものであった。従って、本稿の結論として、既存の市域を保持することが城壁の建設において都市側と宮廷側(国王)の双方にとって重要な条件であったと言える。その他の評価基準としてコルーニャとララシュにおいて「建設費の抑制」が確認できたが、ほぼ全ての都市で、旧城壁の近代化や防御地帯の構築等というように内容は一樣ではなかったが「築城の論理」が認められた。サント・ドミンゴでは旧城壁の近代化に加えて、当初の予想より市域が拡張しなかったため、囲い地を縮小させた城壁が新たに計画されていた。ハバナでは拡張した市域を保全するために新しい城壁が計画されていた。これら中米の 2 都市においては、サント・ドミンゴでは 46 年以上、ハバナでは最大で 11 年というように一定の期間を経て新しい城壁が計画されていたが、双方とも「市域の保全」を前提としていた。カディスでも、異なる「築城の論理」に基づいて 3 つの案が作成されていたが、全ての案は「市域の保全」を前提にしていた。ララシュでは「築城の論理」が「建設費の抑制」と対峙していた経緯が見られた。またイベリア半島のカルタヘナでは第 1 段階の城壁から約 26 年後に第 2 段階の城壁が実現されていたが、背景には旧城壁の近代化に加え、王室の施設を拡張する目的も含まれていた。

参考文献

- 1) Enrique Marco Dorta: Cartagena de Indias, la ciudad y sus monumentos, Sevilla, 1951.
- 2) Juan Manuel Zapatero: Historia de las fortificaciones de Cartagena de Indias, Madrid, 1979.
- 3) Rodolfo Segovia: Las fortificaciones de Cartagena de Indias, estrategia e historia, Bogotá, 2009.
- 4) Javier Rodríguez de Ávila: La llave de la ciudad, fuerte de San Felipe de Barajas, Cartagena de Indias, 2013.
- 5) Donaldo Bossa Herazo: Nomenclator Cartagenero, Bogotá, 1981.
- 6) María Carmen Borrego Plá: Cartagena de Indias en el siglo XVI, Sevilla, 1983.
- 7) Raúl Porto del Portillo y otros: Plazas y calles de Cartagena de Indias, Barranguilla (Colombia), 2011 (cuarta reedición).
- 8) Jacques Aprile-Gnisset: La Ciudad Colombiana, la formación espacial de la conquista siglos XVI-XVII, Cali, 2016.
- 9) José Antonio Calderón Quijano: Las fortificaciones españolas en América y Filipinas, Madrid, 1996.
- 10) Juan Agustin Cean-Bermudez: Noticias de los arquitectos y arquitectura de España, Madrid, TOMO III, 1829.

- 11) Erwin Walter Palm: Los monumentos arquitectónicos de la Española con una introducción a América, Ciudad Trujillo, 1955.
- 12) Francisco Castillo Meléndez: La defensa de la isla de Cuba en la segunda mitad del siglo XVII, Sevilla, 1986.
- 13) José Ramón Soraluze Blond: Castillos y fortificaciones de Galicia, Coruña, 1985.
- 14) David Munuera Navarro: Musulmanes y cristianos en el Mediterráneo. La costa del surestepeninsular durante la edad media (SS. VIII-XVI), Tesis doctoral, Universidad de Murcia, 2010.
- 15) José Antonio Martínez López y otros: Las defensas de la cartagena renacentista: Evidencias arqueológicas recientes de las murallas de Carlos I y Felipe II, An Murcia, 30, pp.179-204, 2014.
- 16) Juan Soler Cantó: El recinto de Cartagena (Historia del casco antiguo), Cartagena, 1993.
- 17) Alicia Cámara: Fortificación y ciudad en los reinos de Felipe II, Madrid, 1998.
- 18) Víctor Echarri Iribarren: Las murallas y la ciudadela de Pamplona, Pamplona, 2000.

注

- 注 1) 築城の類型に関しては次の拙稿でも論じた。主要な工兵の活動からみた 16 世紀後期スペインの要塞化事業 ―地中海から大西洋へ―, 第三回西洋建築史若手研究者研究発表会, 日本建築学会主催, 配布資料 pp.27-34, 2013.12.
- 注 2) 「旧城壁の近代化」に関しては次の拙稿でも論じた。スペイン統治時代 (1462-1704) のジブラルタルにおける築城 ―既存の城壁を活用した都市の防御整備に関する研究―, 『建築史攷』, 鈴木博之先生献呈論文集刊行会編, 中央公論美術出版, pp.89-104, 2009.10.
- 注 3) 参考文献 9) や参考文献 17) では複数の都市が扱われているが、本稿で試みたような一定の基準で各都市の城壁を分析する研究は行われていない。
- 注 4) PARES は、インディアス公文書館(Archivo General de Indias 以下 A.G.I.)を含め、スペインの公文書館の史料を部分的に公開しているサイトでアドレスは次となる。http://pares.mcu.es/
- 注 5) 現地調査は 2018 年 4 月 27-30 日の期間に実施した。以下の専門家から様々な教えを受けた。Sr. Moisés Álvarez Marín(Director de Museo Histórico de Cartagena de Indias), Sra. Lucy Amalia Gómez Vergara(Profesional Especializado de Asuntos Culturales, Sucursal Cartagena), Sr. Gonzalo Zúñiga(Curador del Museo Naval del Caribe).
- 注 6) 湾の防御整備に関しては参考文献 1), pp.9-13, 26-31, 91-96, 99-100, 参考文献 2), pp.59-77, 101-105 に詳しい。
- 注 7) 参考文献 1), p.29.
- 注 8) 具体的に実施案が定まる経緯を示す最初の史料のひとつとして総督ペドロ・デ・アクニヤが宮廷に送付した次の書簡がある。Carta del gobernador(Pedro de Acuña) al Consejo de Indias, 1 de marzo de 1594, Cartagena, A.G.I., Santa Fe 37. 同書簡は参考文献 1), p.53 で要約されている。同書簡の中でペドロ・デ・アクニヤは、同年 11 月 4 日にアントネリが現地に到着する以前、既にカラマリ島の南西に位置するカレタ(Caleta)と後に建設されるサンタ・カタリーナ稜堡付近の地点(Ciénaga del Ahorcado)で幕壁と小さな稜堡(una cortina y traveses)を建造していることを報告している。参考文献 1), p.53. 城壁の議論は、その後、アントネリが 1595 年の城壁案の図面を作成した後に活発になる。
- 注 9) 現地の総督に送られた国王が決定した実施案を記した国王訓令は次となる。Real cédula de instrucción al gobernador de Cartagena, Don Diego de Acuña, 12 de octubre de 1612, A.G.I., Santa Fe, 38. 同書は参考文献 1), pp.204-205 で活字写本されている。
- 注 10) スペインで工兵部隊(cuerpo de ingenieros)が創設されたのは 1711 年であるため以前の ingeniero militar/ingeniero (英 military engineer/engineer) を「工兵」と訳さず「軍事建築家」や「軍事技師」等とも訳すことができる。
- 注 11) アクニヤ案は 1597 年の図面(Fig.2)および実施案を表す注 15) の 1630 年の図面で示されている。しかし注 8) のペドロ・デ・アクニヤの書簡で説明されている当時進められていたカレタの地点の工事に加えて、アントネリの 1595 年の図面に記されているペドロ・デ・アクニヤが現在建設しているという防壁(trinchera 原文では trinchea となっている)の位置からも、本来のアクニヤ案はカレタまで城壁が延長していたと理解できる(Fig.1, Fig.3)。またアントネリの図面(Fig.3)で示されているペドロ・デ・アクニヤが進めている防壁は 1597 年の図面(Fig.2)のように稜堡式にはなっていない。従ってアクニヤ案はこれら 2 枚の図面が作成された 1595 年から 1597 年の間に実施案のように修正されたと言えるが、その一方で、カラマリ島の地形に沿って市域全体を包囲する形式は維持されている(Fig.1)。

注 12)都市と要塞の城壁に適した形状に関してクリストバル・デ・ロハス(Cristóbal de Rojas, 1555?-1614)が執筆した『古代と現代の軍隊に関する概要』では、適切な距離で稜堡と幕壁を配置する場合、円形が適切であるとしている。他方、三角形および四角形の要塞は非常に弱くると述べている。この説明から、円形に近い形状が適切で、直角またはそれより鋭角な角度を伴う形状は不適切であると考えられていたと理解できる。Cristóbal de Rojas: Sumario de la milicia antigua y moderna, Cádiz, inédita, 1607, fol.75. 参考文献 17), p.31.

注 13)アントネッリの湾の築城に関しては次の書簡で説明されている。Carta de Antonelli al secretario Juan de Ibarra, avisándole lo que iba haciendo en Cartagena, 16 de febrero de 1587, Bapista Antonelli, Cartagena. この書簡は参考文献 10), pp.247-248 で活字写本されている

注 14)Consulta al Rey de la Junta de Guerra sobre las fortificaciones del puerto y ciudad de Cartagena, 4 de agosto de 1607, Madrid. この審議録は参考文献 10), pp.292-293, 300-301 で活字写本されている。

注 15)Plano de las murallas de Cartagena construidas por el gobernador Francisco de Murga, levantado por el maestro mayor de las fortificaciones, Lucas Baez, 1630, A.G.I., Planos, Panamá, 48.

注 16)Carta de Luis Fajardo a su majestad, 4 de marzo de 1599, A.G.I., Santa Fe, 219. 同書簡は参考文献 1), p.55 で部分的に原文が引用され内容が要約されている。また参考文献 2), p.48 でも引用されている。

注 17)1599 年頃の図面にはルイス・ファハルドの見解が反映されていると考えられている根拠はファハルドの書簡と同図面がほぼ同じ時期に作成された事実に加えて、ファハルドが調査を実施した背景に基づいている。ファハルドは国王からの 1598 年 6 月 2 日付けの指令(real cédula)で、カルタヘナ・デ・インディアス、ポルトベーロ(Portbelo)、ハバナの 3 都市の防御を視察して報告するように命じられており、その報告書が 1599 年 3 月 4 日の書簡となっている。参考文献 1), p.55, 参考文献 2), pp.48-49.

注 18)注 12)では都市の城壁を含めた形状であったが、城壁に限定した場合、理想的な形状は正六角形であるが、建設費も考慮すると正五角形が適切であると当時認識されていた。参考文献 17), p.30.

注 19)アクニャ案に対しては、”現在のように既存の市域全てを城壁で囲むようにすれば防御に必要な人員は 6 千人にもなってしまう(el sitio... de suyo es tan desacomodado que cercándole todo como oy lo está son menester seis mil hombres para defenderla)”と述べており、アントネッリ案に対しては、”現在貯水槽と呼ばれている地点で都市を切断する、小さくなる都市の平面の方では、同じ図面で確認できるように、他の障害物と共に(訳者補足以下略:城壁の)外側に市域(の一部)が取り残されることになる(a menos planta de la dicha ciudad, cortándola por los Jagüeyes que llaman como se verá en la misma planta, queda la que se dejare fuera por padrasto de lo demás)”と述べられている。これらの原文は参考文献 1), p.55 から引用した。本稿では“”で囲まれた原文の日本語訳の中の()は訳者による補足を表す。

注 20)注 14)と同じ。

注 21)注 9)と同じ。

注 22)Carta de Diego Fernández de Velasco, 26 de julio de 1608, Cartagena, A.G.I., Santa Fe, 38. 同史料は PARES で以下の箇所で開催されている。Archivo General de Indias, SANTA_FE,38,R.4,N.84-3Verso-Imagen Núm: 30/34 築城に関する 2 枚の画像アドレス(書簡)は下記となる。同史料は参考文献 1), p.82 で部分的な引用を含め参照されている。
http://pares.mcu.es/ParesBusquedas/servlets/ImageServlet?accion=42&txt_id_imagen=30&txt_rotar=0&txt_zoom=10&txt_contraste=0&txt_totalImagenes=34&dbCode=5226920&txt_polarizado=0&txt_brillo=10.0&txt_contrast=1.0
http://pares.mcu.es/ParesBusquedas/servlets/ImageServlet?accion=42&txt_id_imagen=31&txt_rotar=0&txt_contraste=0&txt_brillo=10.0&txt_contrast=1.0&txt_totalImagenes=34&dbCode=5226921&txt_polarizado=null&txt_zoom=10&nombreImagen=4%20Recto

注 23)Carta de Cristóbal de Roda al Rey, 18 de enero de 1609, Cartagena, A.G.I., Santa Fe, 219. 同書簡は参考文献 1), pp.203-204 で複製されている。

注 24)注 14)と同じ。

注 25)原文は以下となる。”hay opiniones encontradas sobre si se cercará toda por donde D. Pedro de Acuña llevaba su fortificacion de madera, que esta se tiene por obra muy larga y costosa; ó si se seguirá la cerca cortándose por la calle del Tejadillo hasta las casas de Machado, que llaman el barrio caliente, quedando dentro de la cerca pozos y jaqueyes bastantes para el servicio de la ciudad”. 注 14)と同じ。参考文献 10), pp.300-301.

注 26)参考文献 5), pp.187-188. 現在のサント・トリビオ地区が当時貯水槽地区と呼ばれていた点や同箇所が現在のフェルナンデス・デ・マドリード広場である点は、注 5)で言及した Moisés Álvarez Marín 氏からも教えられた。当時、貯水槽地区以外にも馬車広場(Plaza de los Cochets)付近とサント・ドミンゴ広場(Plaza de Santo Domingo)付近にも井戸(pozo)が存在していた(Fig.1)。

注 27)注 14)と同じ。参考文献 10), p.301.

注 28)”私はヘロニモ・デ・ポルトガル殿(インディアス艦隊の大將)およびこの都市の歩兵隊の隊長に対して都市の防壁案を見せて国王殿下にお伝えした地点で都市を分離することで発生する不利益性に関して協議しました。航海日程が大変忙しいため彼らには見解を書簡に記すことはできませんでしたが、落ち着いた時に記されるということになり、もし(この書簡を送付する前に)提出されればそれをこの書簡と共に送付します(yo mostre a don Gerónimo de Portugal general de la armada de la guarda de las indias y al governador y capitanes de infanteria que en ella tiene el sitio de esta ciudad y su cerca y comunicado con ellos los ynconbinientes que se siguen del acortarla por donde a V.M. le an ynformado, por la mucha pressa(prisa) de su embarcazien(embarcación) no an podido dar sus pareceres por escrito alla lo haran mas despacio y mejor y si aqui me los dieran los enbiare con esta)”。注 22)と同じ書簡で、上記原文は下記のアドレスで開催されている。
http://pares.mcu.es/ParesBusquedas/servlets/ImageServlet?accion=42&txt_id_imagen=31&txt_rotar=0&txt_contraste=0&txt_brillo=10.0&txt_contrast=1.0&txt_totalImagenes=34&dbCode=5226921&txt_polarizado=null&txt_zoom=10&nombreImagen=4%20Recto

注 29)同上。

注 30)”総督は私(工兵ロダ)に対して大將と隊長は都市の一部を切断する方が好ましいと述べていたと報告してくださった(ame ynformado el gouernador que los Generales y cappitanes de ellos que dezian que era mejor cortar parte de ella)”。注 23)と同じ書簡。参考文献 1), pp.203-204.

注 31)原文は以下となる。”el primero que éste lugar a de crezer con el gran trato que tiene y siendo tan pequeño el sitio no tendrán los que a el viniesen donde fundar sus casas y vivienda; lo otro que por donde se pretende cortar, toda el agua dulce queda fuera y en poder del enemigo; lo otro que los propios bezinos que oy tiene rezeviran gran daño en sus haciendas y casas, que derribándoselas es justo que se les pague; lo otro que a de ser ympossible dar fosso a la muralla que se a de aser, teniendose aora bonissimo y natural; lo otro que se le deja al enemigo una muy gran plaza de armas, y con superioridad a esta ciudad, para que con otra fuerza disponga su voluntad abriendo trincheras y plantando baterías, que ...ninguna manera la tiene...quedandose de la forma que está”。注 22)と同じ。この原文は参考文献 1), p.82 から引用した。

注 32)注 26)で述べたように実際にはその他にも市内に井戸が存在していた。

注 33)注 25)と同じ。

注 34)ベラスコ総督は、アントネッリ案に従えば防御にとっても不利益性が生じると述べた後、次のように説明している。”それ以外でも、都市を分離することによって、特定の住民が所有しています全ての建物を解体する際には、国王殿下に対して 100,000 ペソ以上の支払いが生じます(demas de que todos los edificios de casas que tiene bezinos particulares el dia que se deribaren para cortarla le an de costar V.M. mas de cien mil pesos)”。Carta de Diego Fernández de Velasco, 6 de junio de 1609, Cartagena, A.G.I., Santa Fe, 38. 同史料は PARES で開催されている。Archivo General de Indias,SANTA_FE,38,R.4,N.89. 画像アドレス(2 枚の史料)は以下となる。
http://pares.mcu.es/ParesBusquedas/servlets/ImageServlet?accion=42&txt_id_imagen=2&txt_rotar=0&txt_contraste=0&txt_totalImagenes=8&dbCode=5226950&txt_polarizado=
http://pares.mcu.es/ParesBusquedas/servlets/ImageServlet?accion=42&txt_id_imagen=3&txt_rotar=0&txt_contraste=0&txt_totalImagenes=8&dbCode=5226951&txt_polarizado=

注 35)”これ以外にも、都市を分離しようとしています場所には城壁の堀を掘削できません。その理由は、たとえ堀を深く掘削しても 1 年の内の 7 ヶ月、非常に激しく吹きつけます北風と北東風(貿易風)によってすぐに砂で堀が塞がれてしまうからです(demas de esto por donde se pretende cortar no sera pusible dar fosso a la muralla porque aunque se haga con gran profundidad los bientos nortes y bressas que los siete messes del año son muy recios le an de cegar de arena con gran brebedad)”。注 34)と同じ史料。

注 36)注 23)と同じ。

注 37)原文は以下となる。”por causa que el sitio que quieren dejar es mas

alto y eminente de toda la ciudad en donde ay mucha población y monasterios de frayles y edificios de casserias muy buenas las quales abra de pagar su Magestad si se a de cortar la ciudad y ay muchas guertas que tienen muy buenos pozos de agua para beber, los quales no tienen dentro de la ciudad, que todos beben alli”. 注 23)と同じ書簡。参考文献 1), p.204.

注 38)Consulta de la Junta de Guerra al Rey sobre las obras de Cartagena de Indias, 16 de diciembre de 1609, Madrid, A.G.I., Santa Fe,217. 同史料は参考文献 10), pp.308-309 で活字写本されている。同審議録には全ての書簡と図面に目を通した Conde de Puñonorostro と Alonso de Sotomayor の意見も参考にされたと記されている。この 2 名を含め同評議会に参加した委員はここでは名前は省略するが合計で 8 名となっている。

注 39)原文は以下となる。“ha parescido que la ciudad se cerque toda de muralla sencilla con sus cubos ó traveses; y los dos frentes, por donde el enemigo puede plantar la artillería, se fortifiquen tambien con sus baluartes, cuales convinieren para su defensa”. 注 38)と同じ。

注 40) この 1610 年 1 月 20 日付けの指示に関して本研究では原文は確認していないが、その内容は参考文献 10), p.89 および参考文献 1), p.82 を参照した。

注 41)注 9)と同じ。

注 42)”カルタヘナに関して私(国王)は 610 年 1 月 20 日の書簡で貴殿の前任者デイエゴ・フェルナンデス・デ・ベラスコに通知したように都市全域を小塔または小さな稜堡を備える簡単な城壁で包囲し敵軍が重砲を設置できる 2 側面は稜堡を備える城壁を建設するように決定し命じた(La dicha ciudad de Cartaxena tengo resuelto y mandado que se cerque toda de muralla censilla con sus cubos trabeses y las dos frentes por donde el enemigo puede plantar artilleria se fortifique tambien con sus baluartes, lo qual se auisso por carta de 20 de henero del año pasado 610 a don Diego Fernandez de Velasco vuestro antecesor en aquellos cargos)”。注 9)と同じ。参考文献 1), p.204.

注 43)注 22)と同じ。

注 44)注 23)と同じ。

注 45)注 31)と同じ。

注 46)注 37)と同じ。

注 47)本研究で確認している同様な都市として本文で取り上げている以外にはフエンテラビア(Fuenterrabía)を挙げることができるが、当時の図面等は確認していない。またパルマ(Palma)においても旧城壁を改修する際に部分的に配置が異なる城壁が新規に建造されている。

注 48)Santo Domingo, Fortificación, Ca.1592, por Battista Antonelli, Biblioteca Nacional, Madrid, MR/43/235(Sala de Goya). Proyecto para las fortificaciones de Santo Domingo, A.G.I., Mapas y Planos, Santo Domingo, 22.

注 49)1589 年の図面には最初の住民が開始したとする城壁の輪郭線が描かれているが、それは 1608 年の図面で示されている 1543 年の城壁より北側に向かってさらに囲い地が拡がっている(Fig.5 の点線)。また他の図面から判断しても 1608 年の図面で示されている 1543 年の城壁の 4 つの城門とその間の壁体は既に工事が進んでいたと判断できる。加えて 1589 年の図面には 1543 年の城壁と南西の側面が部分的に重なっている稜堡式城壁の輪郭線も描かれている。これは 1543 年の城壁と部分的に配置を重ねた場合の稜堡式の案と想像できる。

注 50)参考文献 11), p.160.

注 51)実際 1543 年に城壁の建設が開始された後、工事を担当したロドリー

ゴ・デ・リエンド(Rodrigo de Liendo, 生没年不詳)は防御施設の工事には不適任であるため、工兵(un ingeniero)の派遣が必要であると現地から宮廷に申請されている。参考文献 11), p.159. Fig.5 にも描いたように、アントネッリの 1608 年の図面から確認できる 1543 年の城壁は、小さな城門を備える中世的な旧城壁になっている。

注 52)ロダが作成した新しい城壁を示す図面にはマルドナド総督時代に計画された城壁の輪郭線も描かれている。Nuevo trazado para la ciudad de La Habana, Cristóbal de Roda, 1603, A.G.I., M.P., Santo Domingo, 20.

注 53)参考文献 9), p.180. 参考文献 12), pp.213-214.

注 54)同地に関しては次の拙稿で分析した。ララチェの城壁の実施案が成立する経緯ーフェリペ 3 世のスペインによるアフリカ北西部における軍事拠点作り(1)ー, 日本建築学会計画系論文集, 第 73 巻, 第 623 号, pp.227-234, 2008.1.

注 55)スパノッキイによる 4 つの計画案に関しては次の拙稿で分析した。1589 年の奇襲後のラ・コルーニャでティブルシオ・スパノッキイが作成した城壁案ー近世スペインの城壁都市の外周部の整地に関する考察ー, 日本建築学会東海支部研究報告集, 第 51 号, pp.741-744, 2013.2.

注 56)スペインの城壁都市における「防衛地帯」に関しては次の拙稿で論じた。El vacío urbano en las ciudades fortificadas del siglo XVI. Tres estudios de casos: práctica de los ingenieros, tratados de fortificación y las leyes de Indias, Cuadernos de Arquitectura y Fortificación, número 2 (2015), Madrid, pp.89-104, 2015.12.

注 57)参考文献 13), pp.35-38.

注 58)歩幅に基づく計測法で多くの場合 1 パソは 2.5 尺(1pie=0.2786m)とされる。

注 59)コルーニャで実際に建設された城壁は 18 世紀半ばに確定しており、その形態は基本的には第 1 案と第 4 案を組み合わせた築城となっている。

注 60)カディスに関しては次の拙稿で論じた。1596 年の奇襲後のカディスにおける工兵クリストバル・デ・ロハスの活動に関して, 日本建築学会計画系論文集, 第 74 巻, 第 635 号, pp.273-281, 2009.1.

注 61)16 世紀スペインにおける「都市抑制型城塞」に関しては次の拙稿で分析した。ティブルシオ・スパノッキイ(1541-1606)がスペインの 4 都市において作成した都市型城塞の計画案に関して, 日本建築学会計画系論文集, 第 719 号, pp.225-235, 2016.1.

注 62)本研究では Fig.9 の作者であるマッテオ・ネローニ(Matteo Neroni, 生没年不詳)に関しては次の文献を参照した。参考文献 18), p.108, 165, 177.

注 63)第 3 段階と第 4 段階の城壁に関しては、まず、第 3 段階の城壁は 1730 年代に計画された。この城壁では、第 2 段階の城壁では外側に位置していた 3 つの高台が収容された。第 4 段階の城壁は、西側に建造された新しい造船所を包囲する形態で 1770 年頃から 18 世紀末に建設された。

注 64)Croquis de la nueva fortificación de Cartagena, 1544, Archivo General de Simancas, M. D. y P., X-24.

注 65)ナバラ王国の副王(在位 1572-75)およびバレンシア王国の副王(在位 1575-78)を務めたイタリア出身の貴族であった。

注 66)参考文献 14), p.592. 参考文献 15), p.183. 参考文献 16), p.42.

注 67)参考文献 14), p.549. 参考文献 15), p.184.

注 68)参考文献 14), pp.586-588. 参考文献 15), p.184.

注 69)第 2 段階の城壁では、敵軍が利用できる 3 つの高台(cerro)が外側に位置していることが問題視され、1576 年にはフラティノが再び新しい城壁を計画したが、同案の実施は中断されたといった経緯も見られる(Fig.10)。参考文献 14), pp.596-604, 610. 参考文献 15), pp.184-185.

ON THE PROCESS OF PLANNING THE WALLS IN CARTAGENA DE INDIAS (COLOMBIA)

– Study on the walls newly planned in Spanish cities between the mid-16th century and the early 17th century –

Shinichi TAKAYANAGI^{*1}

^{*1} Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Daido University, Dr.Eng.

The purpose of this paper is to analyze how the walls newly planned in the Spanish cities between the mid-16th century and early 17th century were planned and evaluated by the military engineers, local authorities and Spanish Court. For this purpose, this paper is composed of two sections. In the first section, this paper analyzes the process of planning the new walls in Cartagena de Indias (Colombia). There were two basic plans, Acuña's plan and Antonelli's, which were evaluated and argued between the Spanish Court and local authorities. And this paper demonstrates that there are two important factors in the evaluation that influence the final decision in the Spanish Court, that is, "preservation of urban area" and "capability for defense". Pedro de Acuña, a governor of Cartagena de Indias, intended to preserve the urban area including cistern and building site as much as possible. Acuña's plan was supported by the local authorities since it provides more opportunity to develop local economy and trade. On the other hand, Battista Antonelli(1547-1616), an Italian military engineer, aimed to realize the walls with higher capability for defense by demolishing a certain amount of the urban area in order to create the more appropriated defensive line for the walls in terms of the art of fortification. Other military officers also seemed to support Antonelli's plan since they probably considered it more effective from military's point of view. So, these two factors were totally opposed each other. Based on these two factors, two basic plans were argued. As a result, Acuña's plan which emphasizes "preservation of urban area" was selected as the one to be constructed. And based on Acuña's plan, the actual walls were almost completed in 1631.

In the second part, this paper discusses if we can observe these two factors mentioned above, "preservation of urban area" and "capability for defense", in other Spanish cities as well. This paper analyzes six other Spanish cities where the walls were newly planned in the same period. Consequently, only in the plans for La Coruña, proposed by Tiburzio Spannocchi(1541-1606), an Italian military engineer, we could see the same relation between two factors as we could observe in Cartagena de Indias. In other cities, like La Habana(Cuba), Santo Domingo(Dominica) and Cartagena in Iberian Peninsula, we could also observe these two factors, but they were not opposed each other unlike Cartagena de Indias nor La Coruña. Therefore, we can conclude that the process of planning the new walls in Cartagena de Indias is not very common in those times. In Habana and Cartagena in Iberian Peninsula, the walls were newly planned in a certain period of time after the former walls were planned in order to preserve the new urban area which was not developed when the former walls were designed. In these cities, the walls were always planned based on "preservation of urban area". In most of the cities, we could observe "capability for defense" like modernization of old medieval walls or introduction of fortification bastioned into medieval cities.

We also could observe other important factor that changes the plan of walls, that is, "construction cost". In Larache(Morocco), a military port in the northwest coast in Africa, several different plans were proposed by Battista Antonelli in order to reduce the construction cost. In Cartagena de Indias, the construction cost was also evaluated, but it did not change the plan unlike Larache. In La Coruña, four different plans were proposed by Spannocchi after the English fleet assaulted the city in order to show several alternative options according to the amount of money to be invested for the fortification.

(2018年10月10日原稿受理, 2019年2月20日採用決定)